諸國お伽話

（左の諸篇は Eleanor L. Skinner. "Ada M. Skinner 兩氏編 „Nursery Tales From Many Lands." による）

狐の旅

フレーベル會研究部

或時、狐が一人で旅をしてゐました。道を歩いてゐる中、木の切り株を見つけて、掘り出さうと思て立止りました。すると上の方をブン〳〵云て大きな蜂がとんで居ましたから、つかまへて袋の中へ入れました。それからドン〳〵歩きつづけて、一番目の家へ來ました。狐はその家のおばさんに、

「一寸其處へ行て來る間この袋を預つて下さいませんか」

と、たのみました。「よございますとも、置いていらつしやい」と、おばさんが云ひました。

「ぢや、どうぞ氣を附けて、あの袋の口をきつとあけないようにして下さいよ」

と、云て狐は出て行きました、狐の姿が見えなくなると早速、おばさんは袋の口を角（すみ）の方から、一寸あけてのぞいて見ました。ブン〳〵ブン、と中から蜂が飛び出しました。そしておばさんの家の鷄が、バクッ、と蜂をとつて食べてしまひました。ぢきに狐が歸て來ました。そして袋の中を見て「私のクマンバチは何處いつた」と云ひました。「まあ、お客樣、私が何が這入てるかと思て一寸角（すみ）の方からあけて見ましたら、蜂が飛び出しましたので、

家の鶏が取て食べてしまひました」と、おばさんが云ひました。

「よし〳〵、それぢあ、其の鶏を持て行くよ」

と、云て、鶏を袋の中へ入れて、ドン〳〵歩いて次の家の處まで來ました。狐はその家のおばさんに、

「一寸、其處へ行て來る間、この袋を此處に預つて下さいませんか」

と、たのみました。

「よございますとも、置いていらつしやい」

と、おばさんが云ひました。

「ぢや、氣を附けて、袋の口をあけないやうにして下さい」

と云て、狐は出て行きました。けれど狐が見えなくなるやいなや、おばさんは袋の角を、そつとあけて、のぞいて見ました。バタ〳〵バタッ、と鶏が飛び出しました。おばさんの家の豚が、バクッと小さい鶏を食てしまひました。まもなく狐が歸てきました。狐は袋の中を見て、

「私の小さい鶏は何處へ行たらう」

と、云ひました、おばさんは、

「まあお客樣、私が一寸何があるのかと思て袋の角の方をあけて見ましたら、小さい鶏が、バタバタと飛び出しました、そして家の豚が、それを食べてしまひました」

と、云ひました。

「よし〳〵、それぢや、其の豚を持て行くよ」

と、云て、狐は豚をつかまへて袋の中に入れ、又ドン〳〵歩いて次の家までまゐりました。狐はそこのおばさんに、

「一寸、其處へ行て來る間、此の袋を此處へ、預て下さいませんか」

と、たのみました。

「よございますとも、置いていらしやい」

と、おばさんが云ひました。

「ぢや、氣をつけて袋の口をあけないようにして

下さい」
と、云て、狐は出て行きました。けれど狐が見えなくなるが早いか、おばさんは袋の口をあけて、のぞいて見ました。
「クキ、クキ、クキ」と、豚が中から出て來ましたバクッ、とおばさんの家の牡牛が、豚を食べてしまひました。
まもなく狐が歸て來ました。狐は袋の中を見て、
「私の豚は何處へ行たのだらう」
と、云ひました。
「まあ、お客樣、私が、何が這入て居るかと思て一寸袋の中をあけましたら、中から豚が飛び出しました、そして家の牡牛がそれを食べてしまひました」
と、話しました、狐は、
「よし〳〵、それぢや、牡牛を持て行くよ」
と云て牡牛を袋の中に入れて、又ドン〳〵と歩きつづけて次の家まで來ました。狐はその家のおばさんに、
「一寸、其處まで行て來る間、この袋を、此處に預て下さいませんか」
と、たのみました。
「よございますとも、置いていらつしやい」
と、おばさんが云ひました。
「ぢや、氣をつけて袋の口をあけないようにして下さい」
と云て狐は出て行きました。けれど狐の姿が見えなくなるが早いか、おばさんは袋の口をあけて中を見ました。すると、モウ〳〵と牡牛がとび出しました、そしてドンドン遠くへ逃げて行きましたおばさんの子供が追ひかけて行て原の方でやつとつかまへました。
まもなく狐が歸て來ました。そして袋の中を見て、
「私の牡牛はどこへ行たらう」
と、云ひました。おばさんは

「まあ、お客様、何がは入てゐるかと思て、私が袋を一寸あけましたら、牡牛が飛び出しましたそしてドン〳〵逃げ出しました。それで家の子供が原の方まで行て、やつとつかまへて來ました。」

と、云ひました。

「よし〳〵、それぢや、その子供を、つれて行きますよ」

と云て、狐はおばさんの子供を袋の中に入れ、ドン〳〵歩いて次の家まで來ました。狐はそこのおばさんに、

「一寸其處まで行て來る間、此の袋を、此處に預て下さいませんか」

と、たのみました。

「よございますとも、置いていらつしやい」

と、おばさんが云ひました。

「ぢや氣をつけて袋の口をあけないようにして下さい」

と云て、狐は出て行きました。

さあ、今度はどうなつたでせう。おばさんは丁度お菓子をこしらへて居る處でした。そして燒きたてのお菓子を、蒸し釜から、おばさんが出した時

「母さん、あたしに頂戴、あたしに頂戴」

と、小さい子供達がさはぎました。そして袋の中に居た子供はお菓子のおいしい香ひをかいで、大きい聲で

「母さん、私にもお菓子少し頂戴」

と云ひました。おばさんが袋をあけましたら中から子供が出て來ました、おばさんはその子の代りに家の犬を袋の中に入れて置きました。それからおばさんはその子にも家の子にもお菓子をわけてあげました。そして皆大よろこびでした。まもなく狐が歸て來ました。けれど袋の口はもとの通りチアンと結んでありましたから、狐は今度は誰もあけなかつたのだと思つて、其儘袋をかづいでドンドン歩いて森の處まで來ました。狐は其處へ休

んで袋の口をあけました。すると、
「ワン、ワン、ワン」
と、犬が飛び出して一いきに狐をたべてしまひました。（ニヰイングランド）

小さい白兎

小さい白兎が、たつた一人で住んで居ました。兎のお家は、キャベッの畑のそばにありました。毎朝お日様が窓からおのぞきなさると、兎はとび起きて、着物をきかへます、そして、「どれ、スープをこしらへるのにキャベッを取て來よう」と云て出かけます。

或る日、兎はいつものように、帽子をかぶつて籠を持て出かけましたが、大きなキャベッがみつかつたので、大急ぎで家へ歸て來ました。入口の戸をあけようとすると、オヤ〳〵、戸があきません、そして中から鍵がかかつて居ます、兎はトントンコッ〳〵、一心になつてたたきました。すると中から大きな聲で、「そこに居るのは誰だ。」と云ひました。

「私は白兎です、今、畑へ行て、スープにする、大きなキャベッを見つけて持て歸た處です」

と兎が答へました。すると家の中の大きな聲が、

「私は大きな強い山羊樣だ。くづ〳〵してゐるとお前なんか、とびついて、三つに切て食べてやる。」

と、どなりました。可哀さうな白兎は、びつくりして逃げ出しました。途中で大きな牛に逢ひましたから、早速

「もし〳〵、牛さん、私は小さい白兎でございま